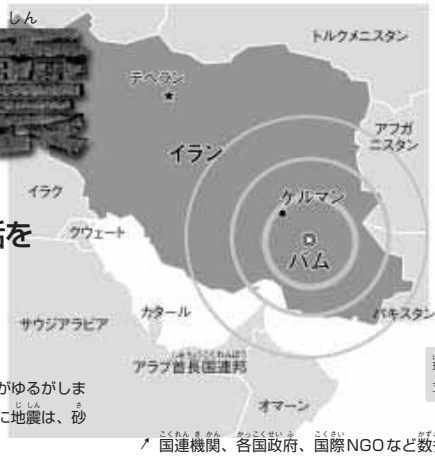
イラン地震



©UNICEF Iran

現地に飛行機で届いたユニセフの支援物資。

12秒間が4万人の命を奪い、数えきれないほど多くの子どもたちの生活をこわしていった…

明け方におそった大地震

昨年12月26日、現地時間午前5時28分、イラン南東部の町バムを大地震がゆるがしました。砂漠地帯にあるバムの200km四方に大きな町はありません。それなのに地震は、砂漠ではなく、まさに町の中心部をおそいました。

なくなった人はおよそ4万人※。けがをした人はおよそ3万人。1995年に神戸などをおそった阪神淡路大震災で亡くなった人はおよそ5,000人ですから、いかに被害が大きいものであったかがわかります。町の建物の85パーセントが倒壊し、家をうしなった人は、45,000～75,000人と推定されています。イランの人口の半分以上は18歳になる前の子どもたちなので、被害を受けた人の半分以上が子どもたちだったはずです。となりの国、アフガニスタンのユニセフ事務所から、地震直後に現場に到着した緊急支援担当スタッフのエザトゥラ・マジードは、「こうした災害のときには、けがをする人よりなくなる人の方が少ないものです。今回は、地震のたてゆれの力と地震がおこったタイミング、建物の弱さなどによって、こんなにもひどい被害になったと考えられます」と話しました。

（※1月16　付 イラン政府発表）

©UNICEF/HQ04-0003/Shehzad Noorani

地震でくずれた町を歩く7歳のアフィファ（左）と8歳のファティマ。二人は、避難したキャンプではじめて知り合いました。アフィファは、「お父さんはどこかへ行ってしまったわ（地震で　くなった）。お母さんはいるけど、家がどうなったのか知らないの」と話します。花束をもったファティマは、「おばさんのおうちでこの花を見つけたの。テントに持って帰って新しいおうちができるまで大切に育てようと思うわ」と言います。ファティマの家も完全にこわれてしまいましたが、幸い、家族は近くの村のおじさんの家にいて無事でした。

↗ 国連機関、各国政府、国際NGOなど数多くの団体が活動し、現地の人びとの役に立つためには、それぞれが連絡をとりあい、協力しあうことが必要です。支援活動がおこなわれるかたわらで、国連のUNDAC（国際災害評価調整）やUNOCHA（国連人道問題調整局）という機関が中心となって、だれがどのような活動をするか、どのように協力しあうかについて話し合いがおこなわれました。この結果、ユニセフは、水と衛生、教育、子どもの保護の3つの分野で、現地の活動を主導することになりました。そのほか、保健や栄養の活動はWHO（世界保健機関）が、食糧や物資の輸送はWFP（世界食糧計画）が担うことになりました。

©UNICEF/E. Carwardine

6万人の人びとのための衛生施設を緊急につくるにはどうしたらいいか、すべての学校がこわれてしまった中で2万人の子どもたちの教育を再開するには何からはじめたらよいか。現地では専門のスタッフがこれまでの経験と知識をしぼって、計画づくりを急ぎました。最初は、支援にあたるスタッフのテントも十分になく、車の中で何日も寝泊まりするスタッフもいました。

1月3日からは、ユニセフも参加して国連合同の本格的な調査がおこなわれました。これにより、被害のようすがよりはっきりしました。たとえば、町にあった3つの病院、24の保健センター、95の保健所は、そのほとんどすべてが倒壊しており、地元の保健スタッフも半分が亡くなっていました。バムにあった学校も10校のうち9校（およそ全体で130校）は完全に倒壊しており、残った学校もあちこちがこわれていました。学校に通う年齢の子どもは、町に32,443人いましたが、このうち9,000人～1万人が命をうしない、先生も3,400人いたうち1,000人がなくなったと見られています。地震で両親をうしなった子どもは1,800人、どちらかの親をうしなった子どもは5,000人という推計も発表されました。

特に衛生環境を整える事業が急を要するものでした。まず、人びとや子どもたちを病気から守る必要があったからです。ユニセフは、トイレやシャワーの設置を急ぎました。

ぼうぜんとなる人びと…

町は一瞬のうちにがれきの山にかわってしまいました。家族をすべてうしなった人、家族の無事を確認できた人の中には、親類や知人をたよって町を出る人も多くいました。政府や支援機関は数日のうちに避難用のキャンプを用意しはじめましたが、人びとはできるだけ家の近くにいたいとなかなか集まりませんでした。何をする気力もなくなってしまった人びとは、支援物資を取りに出ることさえむずかしく、支援に集まったNGOや国連機関、イラン政府の人びとが、テントをまわって支援物資を届けなければならないほどでした。

子どもたちが経験した恐怖もとても大きなものでした。16歳のお姉さんを地震でなくした8歳のサマリアちゃんは、何か質問されてもお母さんにしがみつくようにして一言も話しませんでした。1歳の妹のナージちゃんを抱いたお母さんは「ナージを医者につれていったり、支援物資を取りに行きたいのですが、サマリアを置いていけません。地震以来ずっと私にくっついてはなれようとしないのです」と困ったように話しました。

支援機関の連携した活動がはじまる

地震の後の最初の活動は不明者を探すことです。がれきの下に生きうめになっている人びとを一刻も早く見つけ出し、救わなければなりません。そして、けがをした人や病気の人を治療する緊急の医療支援も必要です。これに、日本を含む多くの国からも援助隊が到着しました。ユニセフ・イラン事務所や周辺の国からもユニセフのスタッフがすぐに現地に入り、続いて、デンマークの首都コペンハーゲンにあるユニセフの物資センターと、となりのアフガニスタンのユニセフの倉庫から、医薬品や医療用具、毛布、浄水剤、水タンク、簡易発電機、テント、緊急支援用の学校セットや、子どもの冬用の衣類など、最初の支援物資が現地に届けられました。↗

©UNICEF/HQ04-0022/Shehzad Noorani

キャンプの中に立てられたテント学校の中に、いろいろな教材を運び込むようす。ユニセフから送られた教材はこうして各学校に配布されていきました。

必要なのは長期にわたる支援 子どもたちの心のケアを！

半月ほどたつと、不明者の捜索や緊急医療の支援に来ていた各国からの援助隊の多くが活動を終えていきました。今度は、町を立て直すための支援に入ります。

建物の被害もさることながら、あまりに多くを失い、大きなショックを受けた人びとや子どもたちの心の傷もすぐにはなおりません。子どもたちは、慣れないテントでの暮らしにつかれ、学校の勉強がおくれてしまうのではないか、ここにいて将来はどうなるのだろうかと、とても心配しています。

避難した人びとのキャンプにあるテントの中で学校の教科書を広げるシマ。シマのおばさん、おじさん、おじいさんは、地震で　くなりました。今、シマは家族8人とこのひとつのテントでくらしています。

©UNICEF/HQ04-0001/SHEHZAD NOORANI

こうした子どもたちを支援するためには、一日も早い学校の再開が必要です。学校は、混乱の日々から日常の感覚をとりもどすことに役立ちます。子どもたちが学校に通うようになれば、家族にもコミュニティにも生活をたてなおそうという前向きな気持ちが生まれます。また、学校に集まってきた子どもたちの心のケアを進めることもできます。

しかし、どこに子どもたちがいるのか、何人の先生が残っているのか、どこに仮設学校を建てたらいいのかなどわからないことだらけでした。

ユニセフは、12月のうちに、緊急用の学校セット「箱の中の学校」（1セットで80人分の教材などをカバーする）を240セット以上届けました。緊急事態にこそ教育が必要だということを知っていたからです。政府の人や現地のNGOと子どもたちの状況を調べながら、町の26カ所に仮設のテント学校がつくられはじめました。同時に、レクリエーション用のキットも届け、避難した人びとのキャンプの中に、NGOと協力して子どもたちのレクリエーション用テントを立

てました。そこで、子どもたちは、遊んだり、笑ったり、大声を出したりして、子どもらしさをとりもどすことができるようになりました。

人びとの努力が実り、1月のなかばには学校が再開されました。400人以上の先生がもどってきて、2月のはじめの時点でおよそ8,000人の子どもたちが学校に通いはじめました。26カ所だったテント学校の数は50カ所を超えています。しかし、先生たちの住むところさえ、まだ、きちんとしていない状態がつづいています。

避難した人びとのキャンプの中につくられた幼稚園用のテントの中で、ユニセフから届いたノートをもらう子どもたち。

©UNICEF/HQ04-0024/ Shehzad Noorani

これ以上、先生のボランティア精神にだけ頼っていては、学校を続けること自体がむずかしくなってしまいます。子どもたちも先生も、安心して学校をつづけられるようにするには、まだまだ問題がたくさんあるのです。

バムの町の再建には時間がかかるでしょう。それと同じように子どもたちの生活をたてなおすにも時間がかかります。これから、長期間にわたる支援が必要とされています。

©UNICEF/E.Carwardine

キャンプに届いたユニセフのレクリエーションキット。

ユニセフ・イラン地震募金受付中

日本ユニセフ協会も、バム地震で被害を受けた子どもたちを支援するために、昨年12月末から緊急募金の受け付けをはじめました。募金は郵便局から送ることができます。

郵便振込口座：00190-5-31000　（財）日本ユニセフ協会

（通信欄に「イラン地震」と明記、送金手数料は免除あつかいです）

STORY

バムの子どもたち、学校へ…

冬のかわいた風が通りぬけます。くだけたがれきから細かいチリがまいあがります。チリの向こうから、風にのって子どもたちの歓声が聞こえてきました。ここのところ、こんなに明るい子どもたちの声が聞かれることはありませんでした。声を聞く人びとの顔がこころなしか明るく見えます。

今日、地震の後、避難してきた人たちのキャンプの中に、テント学校がオープンしました。大きな白いテントの中は、石油ヒーターがあってあたたかく、風やちりも入ってこないので快適です。電気が来ていて、電灯もついています。ひとつのテント教室は30～40人用。バム市の第10地区の小・中学校の子どもたちが通います。子どもの数はおよそ150～200人。もどってこられた先生は10人です。午前8時～10時は女の子、10時～12時は男の子と交替で授業を受けます。お話を聞いたり、絵をかいたり、歌ったり、おどったり。体操の授業もあります。できるだけ地震の前と同じ授業をできるように先生も工夫しています。

みんなと楽しそうにゲームをしていた14歳のモハメド・レザくんは、年のわりに細い体つきをしています。モハメドくんのおじさんやおばさん、いとこたちはみな地震で命をうしないました。「地震のあと、何日かたってから、学校に行ってみたんだ。授業がはじまっていないかなぁと思って。でも、学校の建物は何にもなくなっていた。家族がテントを立てるのを手伝うほかは、することもなくてぶらぶらしてたんだ」

モハメドくんのテント学校の先に、エダラット女子校のテントがあります。その学校のアスマちゃんは4年生。「学校がはじまってとてもよかったです」とアスマちゃんははっきりした声で言いました。「だって、学校では、外の大変なことを忘れていられるでしょう」

アスマちゃんは、友だちと一緒に、先生のお話を聞こうと一生懸命です。新しいおうちがどうなるのか、これからのことはまだ何もわかりません。でも、学校に通いはじめたことで、地震の前の生活をちょっとよりもどすことができました。町の人びとが、がれきの向こうに新しい生活を夢見るのと同じように、アスマちゃんも、何週間か、あるいは何カ月かあとに建つだろう新しい学校を夢見ています。

現地にユニセフの支援物資が届くまで！

物資センターを中心とした世界中のネットワーク

デンマークのユニセフの倉庫　©UNICEF/Supply Div.

箱づめ作業がおこなわれる倉庫の中 ©UNICEF Supply Div./2002-561/S. Blanchet

バムで起きた地震で、ユニセフは最初の支援物資を2日のうちに現地に届けました。ルートはふたつでした。ひとつは、デンマークの首都コペンハーゲンの港にあるユニセフの物資センターから。もうひとつは、イランのとなりの国アフガニスタンのユニセフの倉庫からでした。

ユニセフが最初の支援でバムに届けたもの

- 12万人をカバーすることができる緊急用の保健キット
- 150人の赤ちゃんの出産を支援するのに十分な量の出産用キット
- 14,000枚の毛布（7,600枚の赤ちゃん用毛布を含む）
- 安全な飲み水を確保するための浄水剤625,000錠
- コミュニティ用の大型の水タンク16台（1台は5,000リットル用）
- 簡易発電機3台
- テント、防水用シート、ロープ、その他のシェルター用物資
- “箱の中の学校”（緊急救援用の学校セット）240セット以上（最初の物資を届けたあとの第3便で到着）

たいていの場合、ユニセフが活動するときに必要な物資は、まずその国や地域の中で調達されます。その方が輸送などにかかる費用も安い上に、その国の経済を助けることにもなるからです。

しかし、それがむずかしい場合や、今回の地震のように緊急事態が発生した場合には、コペンハーゲンの物資センターが物資の調達や輸送を担当します。

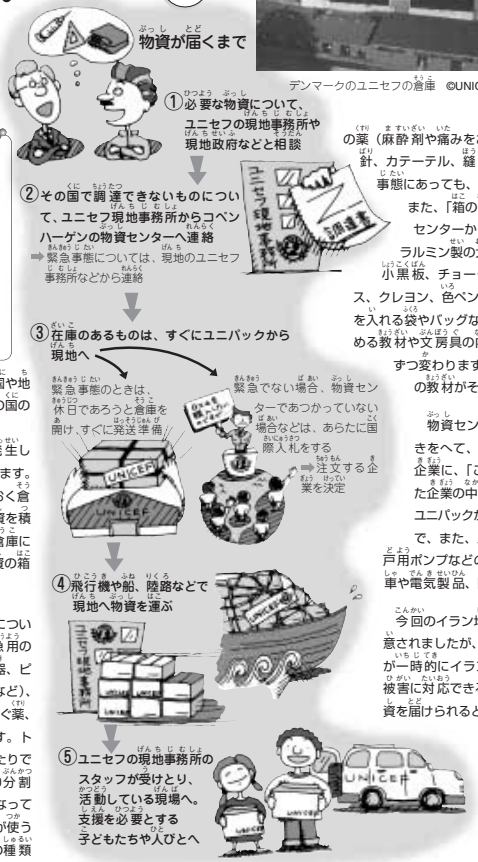
物資センターには、物資の買い付けをする事務所と、物資を保管しておく倉庫があります。倉庫はサッカー場が3つが入るほど広く、港に入った物資を積んだトレーラーやトラックが集まってきます。品質検査を受けた物資が倉庫に運ばれるかたわらで、ベルトコンベアを使って、各地に送り出される物資の箱づめ作業がおこなわれています。

ユニセフは、これまでの長い経験から、緊急の場合に必要となる物資についてよく研究しています。たとえば、ほとんどの緊急事態に届けられる緊急用の保健キットでは、基本ユニットの中に、医療用の基本的な器材（聴診器、ピンセットなど）や応急手当セット（包帯、ガーゼ、体温計、せっけんなど）、安全な水を得るための道具などに加え、12種類の必須医薬品（炎症を防ぐ薬、殺菌剤、抗生物質、脱水症状を防ぐ経口補水塩など）をセットします。トレーニングを受けていない人でも薬を提供したり、保健活動をおこなったりできるように、くわしいガイドブックもついています。また、1キットは10分割できるようになっていて、小さな医療拠点ができても対応できるようになっています。基本ユニットのほか、医療の専門家（医師、看護師など）が使う補助ユニットも用意します。これには、基本ユニットよりも多くの種類の薬（麻酔剤や痛みをおさえる薬、けいれんをおさえる薬などを含む）や、注射器、注射針、カテーテル、縫合セットなどの医療器具が入っています。これらがそろえば、緊急事態にあっても、たいていの治療ができるのです。

また、「箱の中の学校」とよばれる緊急の学校用セットもコペンハーゲンの物資センターから数多く送り出されています。ジュラルミン製の大きな箱の中に、ノート、えんぴつ、小黒板、チョーク、黒板で使う大きな定規やコンパス、クレヨン、色ペン、けしごむ、はさみ、つみ木、教材を入れる袋やバッグなどがつめられて送り出されます。つめる教材や文房具の内容は、送り先の状況によって少しずつ変わりますが、1箱で80人が勉強できるだけの教材がそろいます。

リベリアの子どもたちのもとに届いた「箱の中の学校」©UNICEF WCAR/Kent Page

物資センターでは、国際入札というてつづきをへて、物資を購入しています。世界中の企業に、「このような品物を求めています」というお知らせを出し、それに応じた企業の中から、品質がよく、もっとも安く提供してくれる企業に注文します。ユニパックがあつかっている品物は、日用品から医薬品などの専門的な物資まで、また、えんぴつやボールペンといった小さなものから、ベッド、自動車、井戸用ポンプなどの大きなものまで1,700種類を超えています。日本の企業には自動車や電気製品、医薬品などが注文されることが多いそうです。

今回のイラン地震では、現地からの情報にもとづいて、コペンハーゲンで物資が用意されましたが、同時に、となりの国であるアフガニスタンの倉庫にあった支援物資が一時的にイランに届けられました。支援活動が続くアフガニスタンでは、緊急の被害に対応できるような物資が保管されており、距離も近いため、より早く現地に物資を届けられると判断したからです。

このように、ユニセフは、どんなときでも、もっとも早く、もっともよい方法で、必要なものが現地に届けられるように、日ごろから準備しています。